

2006年(ワ)第6484号

謝罪及び損害賠償請求事件

原告 王 子雄 外39名

被告 日 本 国

意見陳述書

2007年1月24日

東京地方裁判所民事第13部 御中

中華人民共和国四川省樂山市中区新村社区紅航宿舍2棟2单元2階1号

重慶大爆撃被害対日賠償請求訴訟原告 羅 保清

1 私は、羅保清と申します。1925年5月24日生まれで今81歳です。

私は、四川省樂山市で生まれ、現在も樂山市に住んでいます。

樂山は、3000年の古い歴史を持ち、世界遺産の樂山大仏や峨眉山がある風光明媚な都市です。また著名な文学者で歴史家の郭沫若が生まれ育ったところです。郭沫若は1937年までの10年間日本に亡命していましたが、その期間家族と共に千葉県市川市に住んでいた縁で、樂山市は市川市と友好都市になっています。

この樂山市に対して、日本軍は、1939年から1944年までの間に5回無差別爆撃を加えました。その中でも、1939年8月19日の最初の爆撃は、樂山市民に最も甚大な被害をもたらしました。

日本軍は、1939年8月19日の爆撃で、樂山城區の12の街道筋を全

壊させ、3つの街道を半壊させ、また2000人を超える無事の市民を死傷させ、万をも超える人々の帰るべき家を奪いました。日本軍の楽山爆撃は、国際法に違反して無防備の楽山城區に残虐な無差別爆撃を加えたのです。

2 私は1939年8月19日の爆撃当時14歳でした。学校に入るのが遅れたため、当時公信小学校の小学生でした。私の家族は、父羅懷徳（当時41歳）、母羅吳氏（当時36歳）と弟羅良臣（当時3歳）、妹羅秀珍（当時0歳）と私の5人家族で、楽山市内の肖公嘴附近に住んでいました。

父は、看板を作る商売をしていました。自宅は、店舗を合わせると120㎡（木造の二階建て）の広さがあり、仕事も順調で豊かな生活を送っていました。しかし、この平和な生活も、日本軍による楽山市に対する爆撃によって終わりを告げました。

楽山市では、8月19日以前から、日本軍の空襲を知らせる警報が度々鳴っていました。8月19日の数日前、母は、実際の爆撃の際に幼い弟や妹を抱えて避難するのは非常に危険だと考えて、3歳の弟と生まれて数ヶ月しかない妹を連れて、田舎の月児地という所に避難しました。

8月19日、私は、小学校が夏休み中だったので、朝ご飯を食べてから城外の肖公嘴の河の土手付近で遊んでいました。11時頃、警報が鳴りました。12時頃、数十機の日本軍の飛行機が大仏寺方向から飛んできたのを見ました。私は、子供でしたので、最初はこんなに多くの飛行機が見れて面白いと思っていました。しかし、その直後には、飛行機が楽山城内に次々と爆弾を落としましたので、大変なことになったと分かりました。

私は、家の方も爆撃されたのを見て、怖さで一瞬動けなくなっていました。家の状況を確認したかったのですが、楽山城内はすでに炎の海になっており、入れませんでした。

爆撃後間もなく、楽山城内からどんどん人が城外の河の方に逃げてきて、

多くの人が小舟に乗って対岸へ逃げました。人が多すぎて小舟が沈没したため溺れて死んだ人も少なくありません。

樂山の街は、日本軍の爆撃で徹底的に破壊されました。城内の家には、父のほかに奉公人2人と従業員2人の合計5人がいましたが、その5人とも爆弾の直撃を受けて死んでしまいました。

爆撃が終わった後、私は家に戻って探しましたが、父や奉公人らの遺体すら見つけれませんでした。

自宅の二階建てだった建物は、かげも形も無くなっており、建物があつた場所には爆弾が破裂してできた直径10メートルを超える数個の穴だけが残っていました。

- 3 8月19日の日本軍の爆撃は、私の家に想像できない苦痛と計り知れない損害を与えました。財産が灰燼に帰してしまっただけでなく、父の死によって、私の家族は生活のよりどころを失い、流浪の暮らしをしなければなりませんでした。母は、爆撃後、3歳の弟と未だ1歳にならない妹を見守りながら、絹糸紡ぎの仕事をしていましたが、大変苦しい生活でした。私も学校を中退しなければならなくなり、あちこちで臨時工をしたり岸で船を引いたりして、その収入で家族の生活を支えました。結局、私は、再び学校に通うことはできませんでした。

苦労を重ねた母は身体をこわしてしまい、重病を患って数年後には亡くなりました。このため、私が幼い兄弟2人を一人で養わなければならないようになりました。いくら頑張っても私たち3人は十分な食べ物を入手することは出来ませんでした。彼らを学校に行かせることは到底出来ませんでした。

- 4 1949年中華人民共和国が成立してから私は初めて正式に就職しました。1951年から1955年まで私は中国人民志願軍に入っていました。復員

後は樂山市の東方紅運輸会社に戻り定年退職までその会社に勤めました。

日本軍国主義は私の父を死亡させ、財産を奪ったため、謝罪と賠償すべきです。

中日両国の人民は友好です。しかし、日本軍国主義が樂山に対して行った爆撃は樂山の人々に永遠に忘れられない苦痛を与えました。日本政府が中国侵略戦争と重慶大爆撃は犯罪であることを認め、謝罪と賠償をすれば中日両国人民の友好は永遠に続けていけると思います。

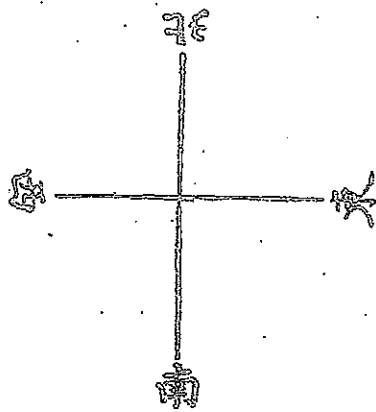
以上

1939年8月19日の楽山爆撃被害図

(楽山県城内外街道図より作成)

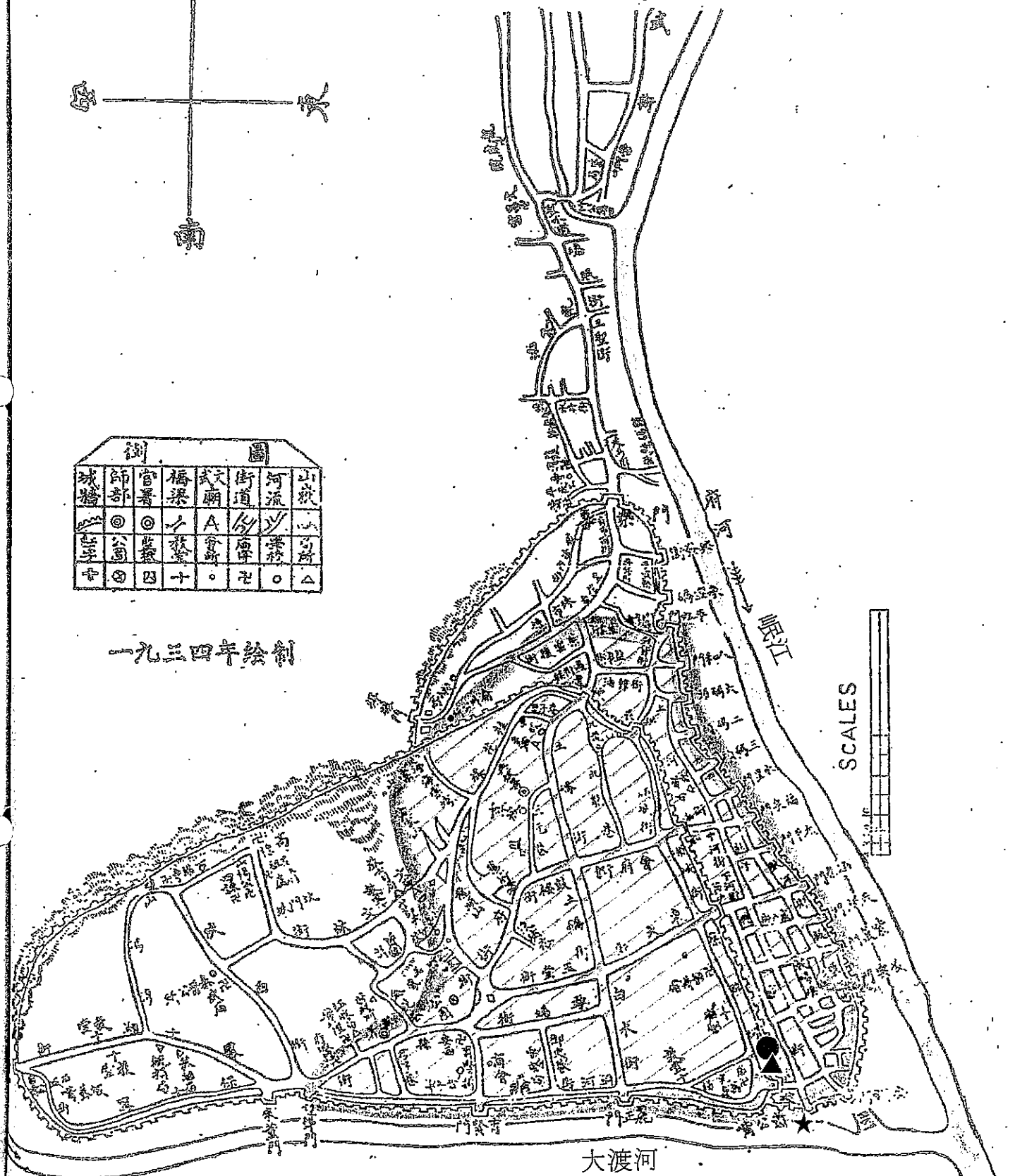
桃色内 爆撃被害地区

黄緑色 火災による被害の激しい街路地区

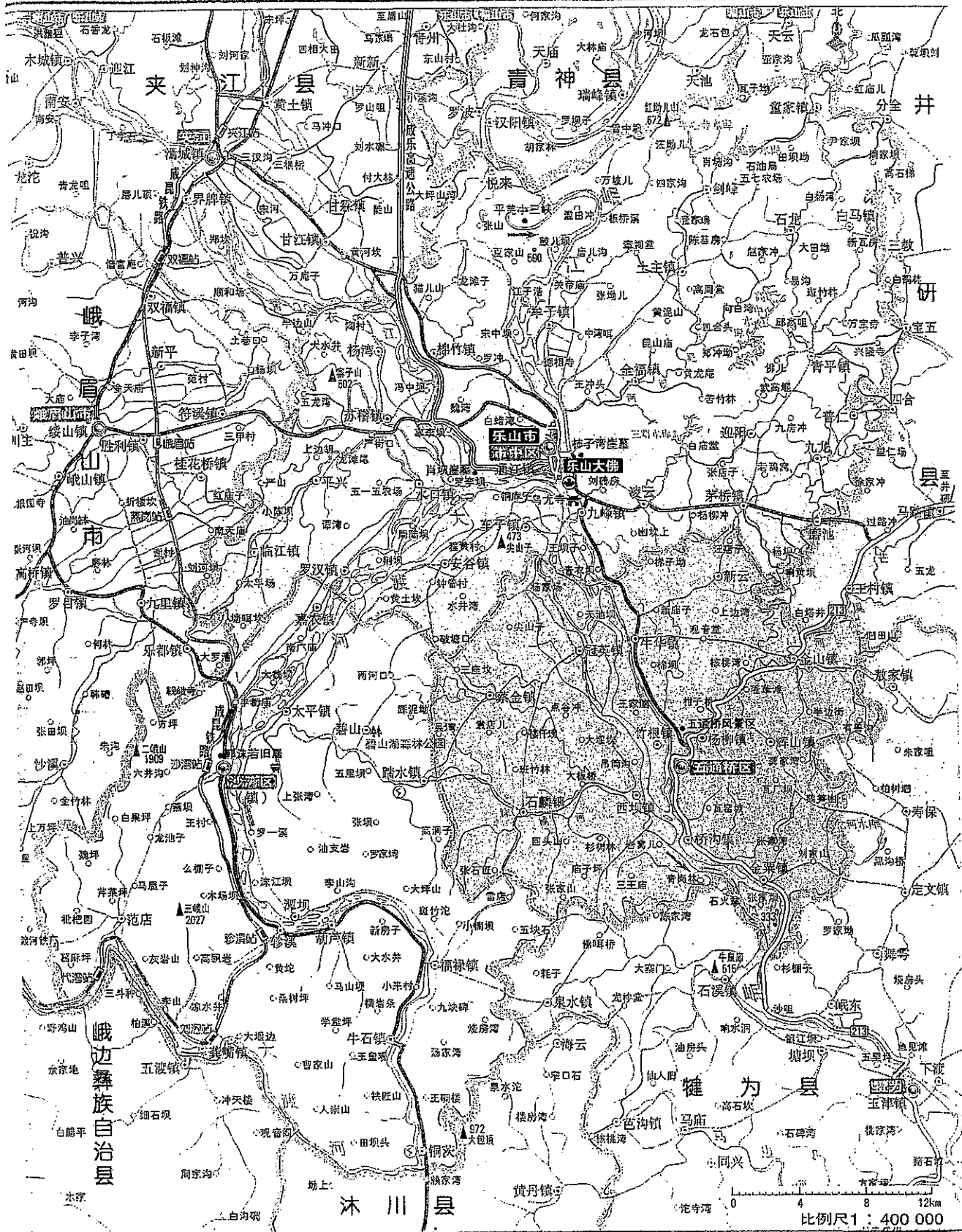


御 圖									
城	師	官	橋	武	天	街	河	山	
牆	部	署	梁	廟	道	道	流	嶺	
①	②	③	④	A	⑤	⑥	⑦	⑧	
⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	

一九三四年绘制

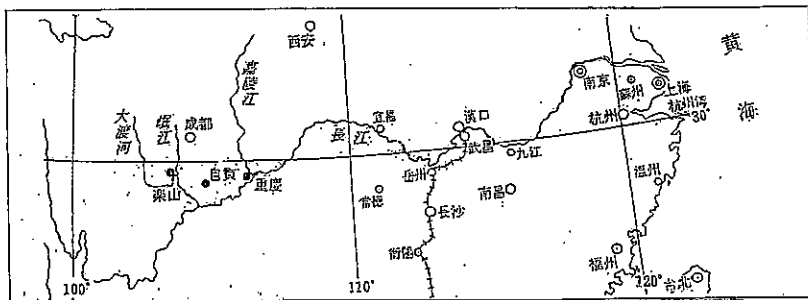


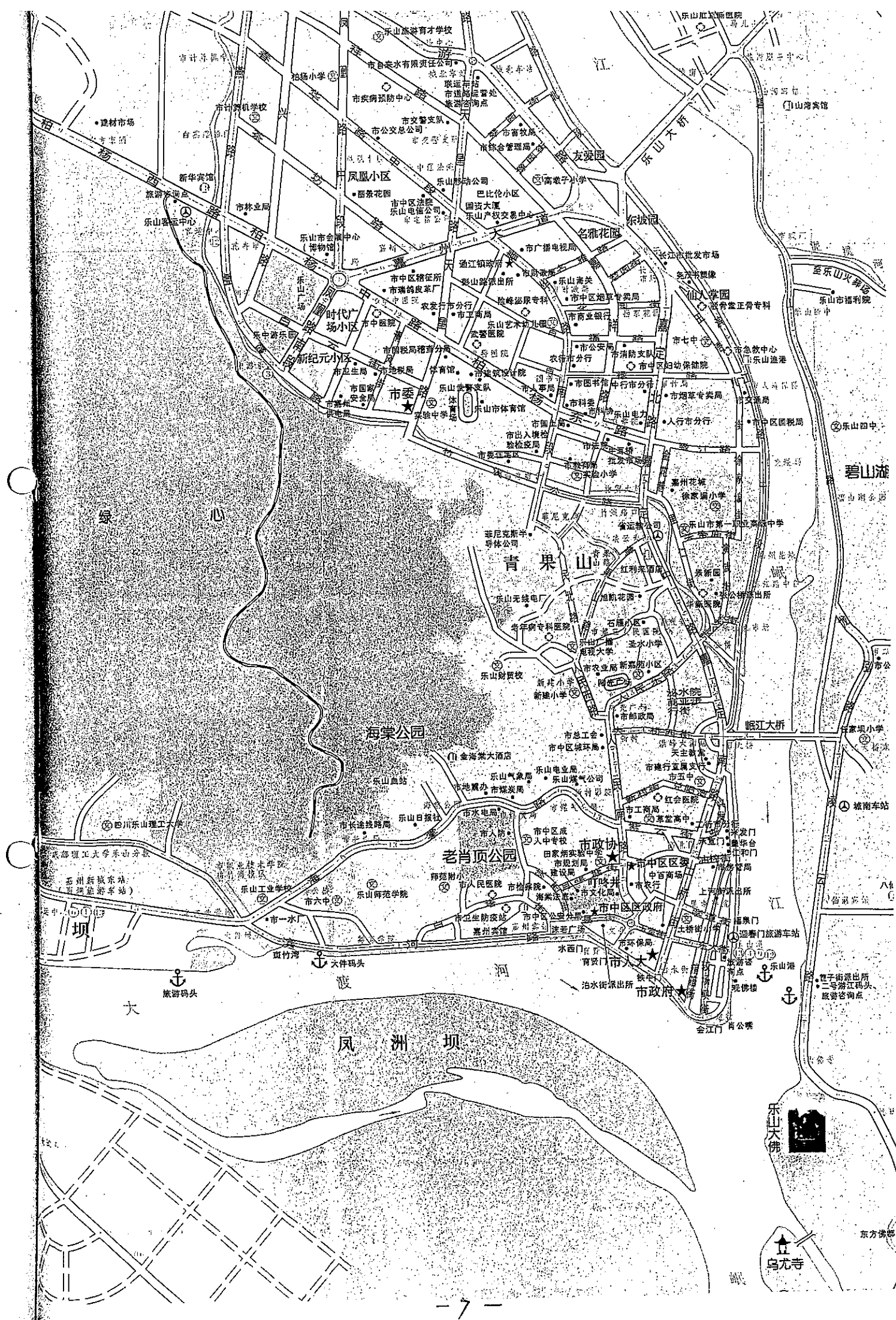
- 原告羅保清の当時の家（自宅兼店舗）[肖公嘴]
- ▲原告羅保清の父羅懷徳の死亡地点[自宅兼店舗]
- ★原告羅保清の避難地点[肖公嘴の河のほとり]



出典：『四川省地図冊』（成都地図出版社、2005年）

重慶大爆撃関連地図（●印は本訴訟の爆撃被害地）





泰山大柵

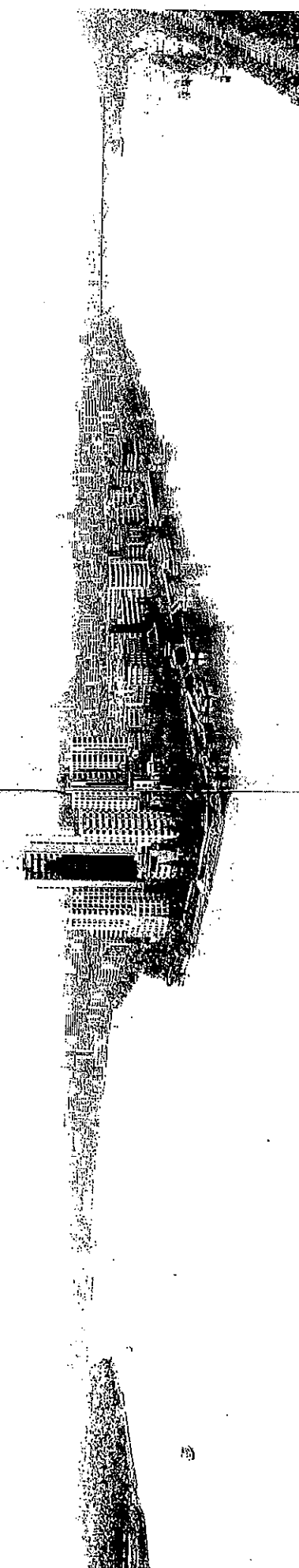


泰山大柵



“天晴見城眉，如向波上浮。”（唐·岑参）

泰山大仏から対岸の泰安市街を臨む。
右手の川が岷江、左手の川が大渡河。



左手の雲の中に見えるのが峨眉山。

市中心城区远眺